

2025年度 第24回全国大会 開催のご案内

第24回全国大会に向けて  
第24回全国大会実行委員長 齋川貴嗣  
(高崎経済大学経済学部准教授)

日本国際文化学会第24回全国大会は、2025年7月5日（土）、6日（日）に高崎経済大学で開催します。このたびは北関東地区で初めての大会開催となります。北関東、特に群馬の地は、古来より異なる文化的背景を持つ人々が行き交い、「共に生きるための工夫」を積み重ねてきた場所でした。例えば、ユネスコの「世界の記憶」に登録されている「上野三碑」は、古代東アジアにおける文化交流の存在を今に伝えています。また、世界文化遺産の富岡製糸場は、近代日本と西洋との技術交流を物語る遺構です。さらに現代では、外国人人口が2割を超える大泉町、ロヒンギャの人々が集住する館林市のほか、県内に10か所近くの本モスクが存在しています。まさに群馬は、国際交流と多文化共生の長い歴史経験を持ち、現在もその最先端にあると言えるでしょう。

他方で、移民・難民など異質な他者に対する差別や暴力を煽る動きが近年世界各地で広がっており、こうした動向に群馬も無縁ではありません。戦時動員により群馬県内で犠牲になった朝鮮人を追悼する施設に対して一部保守系団体が攻撃を繰り返し、最終的に群馬県が追悼碑を撤去したことは記憶に新しいところです。このように地域社会で実践されてきた多文化共生の努力に対するバックラッシュが群馬においても起こっています。

私たちの「共に生きるため」の営みが問われている現在、今大会が国際文化の意義について再考する機会になることを願っています。

全国大会開催要項

【開催日時】 2025年7月5日（土）～6日（日）

【開催大学】 高崎経済大学  
〒370-0801 群馬県高崎市上並榎町1300

【参加費・申込】 学会ホームページ等にて今後ご案内します。

大会日程案

1日目：7月5日（土）	2日目：7月6日（日）
9:00 受付	9:00 受付
10:00～12:00 自由論題	10:00～12:00 自由論題
12:00～13:30 大学院生交流会／理事懇談会	12:00～13:30 総会
13:30～15:30 共通論題	第15回平野健一郎賞授賞式
15:40～17:40 シンポジウム	ICCO資格認定報告
19:00～ 情報交換会	13:30～14:30 フォーラム
	14:30～16:30 共通論題

※自由論題の採択数等によりスケジュールを変更する可能性があります。

### 多文化共生の歴史と課題—差別、偏見、排外主義

本学会は創立から間もなく四半世紀となります。本学会が設立された2001年は、アメリカで9.11同時多発テロが発生し、その衝撃的光景から多くの人々が西洋世界とイスラム世界の「文明の衝突」を想起しました。しかし、学会設立記念シンポジウムにおいて平野健一郎氏は、「9.11以後も、文化によって生き続けなければならない」と述べ、文化の多様性を擁護する理論となり、文化の多様性を維持する実践の支えとなる国際文化学を提唱しました。こうした理念は設立当時から多くの会員に共有され、学会の研究教育活動を通して受け継がれてきました。

それから25年を経ようとしている現在、私たちはどのような状況にあるのでしょうか。ウクライナやガザではあからさまな暴力と破壊が繰り返される一方、公然と差別発言を続ける人物がアメリカ大統領に返り咲き、移民などへの排外主義的政策を主張する極右（極左）勢力がヨーロッパで伸長しています。こうした世界的傾向に日本も例外ではなく、在日やアイヌへのヘイト・スピーチを憚らない政治家が現れ、最近では主にネット上でクルド人が攻撃対象となっています。このように国際文化学が拠って立つ文化の多様性、多文化共生の理念が大きく揺らいでいるのが現状です。

今こそ私たちは多文化共生の歴史を振り返り、その課題に真摯に向き合わなければならないでしょう。本大会では、ユネスコの世界遺産事業を政治と文化の相克という観点から検討するシンポジウムを企画しています。多文化共生の歴史と課題について、その最前線である群馬の地で会員の皆様と問題意識を共有し、議論を深めたいと思います。

### 共通論題の発表タイトル

1. 自治体と国際文化—平和と経済開発をめぐるグローバル・ヒストリー  
代表者：高光佳絵（千葉大学）
2. 鶴見和子の／という環境思想—国際性、ジェンダー、そして生命へ  
代表者：森田系太郎（立教大学）
3. 「地域への目ざめ」を介した複言語・複文化教育プロジェクト  
代表者：高橋梓（近畿大学）
4. 南方抑留の残像としての東南アジアイメージ  
代表者：山本博之（京都大学）

※順不同。発表者は代表者のみ記載。

#### 【大会会場への交通アクセス（JR高崎駅から）】

##### ◆群馬バス（20～30分、350円）

高崎駅西口バスのりば2番

「箕郷」行き／「榛名湖」行き、「経済大学前」下車

##### ◆高崎市市内循環バス「ぐるりん」（30～40分、200円）

高崎駅西口のりば4番

系統番号3「経大・金井淵コース」、「高経大前」下車

##### ◆タクシー（15～20分、2,000円前後）

高崎駅西口タクシーのりば

複数名でお越しの場合はタクシー利用をお勧めします。

#### 【宿泊先】

JR高崎駅周辺にホテル等多くの宿泊施設があります。宿泊に関しては各自で手配をお願いします。

#### 【大会参加費・大会申込】

大会参加費と振込先、参加申込方法については、学会ホームページ等で今後ご案内します。

#### 【大会事務局】

日本国際文化学会第24回全国大会実行委員会（実行委員長 齋川貴嗣）

連絡先メールアドレス：[jsics2025@gmail.com](mailto:jsics2025@gmail.com)

連絡先住所：〒370-0801 群馬県高崎市上並榎町1300  
高崎経済大学経済学部 気付

新春恒例となりました対談企画、今回は四人の会員による対談です。

加藤恵美（帝京大学） 斎川貴嗣（高崎経済大学）  
菅野敦志（共立女子大学） 高橋梓（近畿大学）

聞き手：川村陶子

—新春対談企画ということで、お話をお伺いしたいと思います。まず自己紹介と入会のきっかけをお願いします。

加藤：加藤恵美です。帝京大学で教員をしております。専門分野は人の国際移動です。入会の時期についてはあまり覚えていないのですが、2012年に国際文化会館で第11回全国大会を開催した際に運営のお手伝いをしたことが、本格的に学会に参加するきっかけだったと思います。最初に研究の報告をしたのは翌年龍谷大学で開催された第12回大会です。

斎川：高崎経済大学の斎川貴嗣です。国際組織の歴史研究が専門で、特に文化交流を目的とした国際組織、具体的には国際連盟の知的協力国際委員会とUNESCOの歴史を研究しています。学会とのファーストコンタクトは、おそらく2003年に早稲田大学で開催された第2回全国大会です。当時は修士課程の一年生で、大会のお手伝いをした記憶があります。博士課程進学後、2006年の東北大学大会で研究報告を行いました。私の学会デビューは日本国際文化学会です。

菅野：菅野敦志です。共立女子大学国際学部にも所属しております。専門は台湾現代史です。本学会への入会は2003年でした。本学会では大変多くのご縁をいただいております。2005年の法政大学大会で初めて報告をし、2007年の名桜大学大会にも申し込んだところあいにく台風に見舞われましたが、なんとか現地にたどり着き発表できました。不思議なご縁で、後に名桜大学に就職した2011年には10周年記念大会・シンポジウムの開催をお手伝いすることになりました。

高橋：近畿大学の高橋梓と申します。専門分野はフランスと日本の文学研究とフランス語教育です。2006年に東北大学で全国大会が開催された際、当時東北大学の国際文化研究科に在学中だったこともあり、大会の運営のお手伝いをしたことがあります。その後は別の学会でフランス文学を研究していました。しかし行き詰まりを感じ、恩師である小林文生先生が本学会の会長を務められていたこともあり、2016年の早稲田大学での全国大会に参加しました。その際こちらにいらっしゃる三名の先生と井上浩子先生が企画されたセッション「国際文化を問い直す」に感銘を受け、本学会に関わることとなりました。

—本学会は来年25周年を迎えますが、皆さんはそれぞれ半分くらいの時期は学会に所属されているのですね。それではなぜここまで学会にコミットするようになったのか、教えていただけますか？

加藤：もっとも印象に残っているのはICCOの仕事です。初めてICCOの資格審査委員になったときの委員長が岡真理子先生でした。先ほど申し上げた国際文化会館での全国大会で、岡先生から資格審査委員になってほしいと打診を受けたことが、本学会にレギュラーで参加することになったきっかけです。短期集中セミナーをバタバタと運営していた初期の頃がすごく楽しかった思い出です。あのときにアットホームな家族観が芽生えたと思います。

斎川：私はもっぱら研究で関わってきたと思っております。自分の研究においてこの学会がいくつかの節目になりました。まず、学会デビューが日本国際文化学会です。とても緊張した記憶があります。その後、留学のために学会から離れましたが、帰国し、先ほど話題になった2016年の早稲田大会でセッションを行いました。当時はポスドクであり、研究者としてのスタートを切る節目となったと思っております。内容は歴史学の観点から国際文化の意義を検討するものでした。このときはフロアの方からも共感を得て、中でも小林文生先生から熱心にエンカレッジしていただくようなコメントを賜ったことを覚えております。

菅野：危機の節目に文化の重要性を再認識させられる学会だと思えます。911が起こった時に学会が設立され、その10年後には3.11が起き、同年に着任した名桜大学で10周年記念大会を開催しました。沖縄は地政学的にも重要な場所ですが、そのような地でハードパワーではなくソフトパワーとしての文化の重要性を議論する記念シンポジウムを開催できたのは意義深かったと思います。また加藤さんのお話にあったICCOですが、2017年と2018年の短期集中セミナーを沖縄で開催したことも思い出に残っております。研究成果を挙げることが学会の大事な仕事ではあるものの、研究を学会単位で、とりわけ学部生の教育に還元し、研究と教育の両輪に真摯に向かい合う学会の姿をICCOでは見る

ことができました。大変でしたが、それ以上に感動をいただきました。異分野交流ができる本学会の面白さ、懐の深さを感じ、多くの他分野の先生方にもお会いすることができてとてもよかったと思っております。

高橋：国際文化学会に入会した2016年は、Brexitとトランプ氏の大統領就任の年です。フランス文学を研究していた頃、私には社会について十分に見解を述べられないもどかしさがありました。しかし国際文化学的手法に基づくことで、ナショナルなものについての考察を専門としてできるのではないかと思ったのです。そのような問題意識から、2017年の宮崎公立大学大会での共通論題、2018年の多摩大学での自由論題に取り組んでいきました。大きな節目は2019年です。翌年に近畿大学での大会開催を控えた中、長崎大学で平野健一郎賞を受賞し、開催校挨拶、受賞者スピーチなど、大会中に何度も登壇した記憶があるんです。ニューズレターにも自分の写真が載り続け、しかもコロナにより大会が二年連続となったことで、毎号のようにニューズレターに記事を書き続けていました。私はおそらくこの時期に皆さんに覚えられたのだと思います（笑）。大会開催、学会賞受賞、コロナと、いろいろな偶然が重なり、気がついたら学会の中心で仕事をするようになってしまいました。

—皆さんのお話から学会の特徴が浮かび上がってきました。一つ目は異種格闘技的とも言える学際的な学会であること、二つ目は学会が若手の研究者を育てる役割を担ってきたこと、三つ目は研究者だけではなく学部生の教育にも研究成果を役立てていることです。では次に、皆さんが今学会で取り組んでいることについて教えてください。

斎川：すでに広報しておりますが、高崎経済大学での第24回全国大会のテーマは「多文化共生の歴史と課題——差別、偏見、排外主義」といたしました。現在、学会が寄って立つ多文化共生の理念・実践を揺るがず事態が国内外で発生しています。これを踏まえ、多文化共生の歴史を振り返り、その課題を検討したいと考えています。シンポジウムではUNESCOの世界遺産にまつわる文化と政治の相克について多面的に考察いたします。群馬は多文化共生の最前線ですので、そのような場で皆さんと議論したいと思っております。

菅野：今は20周年記念事業として教科書を作成しています。加藤さんたちと幹事会を務めておりますが、皆さまのお力添えで山を越えることができ、嬉しく思っています。また、私が所属している共立大学国際学部は、もともと国際文化学部としてスタートしました。国際文化を冠する学部や学科が減少傾向にあると言われたりしていましたが、その一方で、たとえば日本女子大学では新たに国際文化学部を立ち上げており、決して国際文化学的視座で研究・教育を行うことが廃れてきたわけではない

と思います。危機的な状況にあるほど、むしろ国際文化学的な観点で世の中を理解することが求められているのではないのでしょうか。昨今の多様性の軽視の風潮を見ても、国際文化学の必要性は感じますし、会員の皆さんが所属先で国際文化学的なことを教える意義をどのように感じられているかを、ぜひ知りたいと思います。

加藤：私も菅野さんとともに20周年記念事業の教科書を完成させることに微力ながら尽力していきたいです。会員の皆様にぜひご協力を賜りたいです。

高橋：研究と教育のつながりこそが興味深いと思っております。私が所属している日本フランス語教育学会では、複言語・複文化が大きなテーマとされています。私自身の研究において、国際文化学と複言語・複文化のつながりを感じつつあります。この着想を文章化できれば、他学会の教育関係者と本学会で議論することができるのではないのでしょうか。高崎経済大学での全国大会では、さっそく複言語・複文化をテーマとした共通論題を行いたいと思っております。

—皆さんのお話から、25周年を迎える学会の課題や方向性が見えてきた気がします。先ほどお話が出ましたように、この学会の創立は9.11同時多発テロが起こった2001年です。その25年後の世界は、文明の衝突とまでは言えないものの、国内外では分断が顕著になってきたように思います。このような時代に国際文化学の研究・教育を行う意義はますます大きくなっているでしょう。高橋さんがおっしゃった複言語・複文化、すなわち個人の中での多文化性を追求して世界の分断を乗り越えていくこと、あるいは世界は引き裂かれているようでいて実は繋がっているのだと明らかにしていくこと、そういったことが学会に求められているのではないかと実感しています。それでは、最後に一言ずつお願いいたします。

加藤：私はこの学会を信用しているので、与えられた仕事をちゃんとやっていきたいと思っております。ご指導を受けた平野健一郎先生が信頼するコミュニティが日本国際文化学会ですし、実際にどの先生も非常に誠実で、いろいろなことに熱心に取り組まれる姿を拝見してきました。だからこそ、学会に求められる仕事を行っていくことが重要だと思っておりますし、その準備はできています。今取り組んでいる20周年記念事業が終わったら、次はその教科書をちゃんと授業で実際に使う手探りをしていこうと思っております。

斎川：個人的には、論文を書き、『インターカルチュラル』に投稿したいと思っております。そして学会25周年を考えると、出発点がアメリカの同時多発テロであったこともあり、本学会は文化の多様性を訴え続けています。他方で、文化の個別性だけでなく、文化の普遍性の問題に関しては、我々の考えはまだまだ及んでいない

のではないのでしょうか。国際社会を見ても多様性は人々の関心を失いつつあります。ドイツでは極右だけではなく、左翼すらも普遍性を嫌うところがあります。文化が違えども、同じである——これを実感するのは簡単なのですが、国際文化学会としてどのように理論化するかという点が25周年を迎える学会の課題だと感じております。

菅野：私は20周年記念の教科書で〈際／あいだ〉をキーワードとして国際文化学を提示することで、これまでの学会の成果を明確に打ち出すことができていると思っています。先ほどお話にあったように、世界はナショナルなレベルで分断されているように見えても、文化では繋がれるのだという希望を明示できる学問こそが国際文化学の良さではないのでしょうか。そのような希望を将来に見出せるような教科書を通じて、学会の良さを皆様に伝えることができれば、と考えています。

高橋：この座談会がとても面白く、皆さんの話を聴いている時間がとても幸せでした。終わらないでほしいとすら思っています。まずはこのような気持ちになれる理由、学会の居心地の良さを正体を探っていきたいです。国際文化学会で出会う人たちは何が違うのか、なぜ皆さんと話しているとこのように楽しいのかと、

改めて感じています。私はこれまで学会で大会開催、シンポジウム企画、毎回の自由論題や共通論題など、様々なことを行ってきました。正直、そのたびに精根尽き果ててしまうのですが、終わるとなぜかまたそこから新たなものが始まるんですね。今年度も、自由論題や論文執筆を経て、「もう終わりでいいかな」と思ったりもするのですが、まだ終わらないんです。この学会の中で自分がどこまで続くのかを楽しみに、新しい企画を作り続けていきたいです。

—皆さんのお話から見えてきたこの学会の特徴や魅力を一言で語るとHumanityなのかな、と思いました。複数形のHumanitiesは人文学を意味します。この20年余り、Diversityという個別的なものを求め続けてきましたが、斎川さんがおっしゃるように普遍的なものに立ち戻る必要もあります。その際に「人であること」に立ち戻ることが、これまで、そしてこれからの学会のテーマとなっているのかなと思います。学会の居心地の良さや、会員の熱心さも、形を変えたHumanityではないのでしょうか。学生から教員まで、一人の人間として向き合っていく姿勢こそがこの学会の良さであり、それをぜひ次に繋げて行ってほしいと感じました。本日はありがとうございました。



学会創立25年を見据えた興味深い対談でした！  
登壇者の皆様、司会の川村会長、ありがとうございました！



**INTERCULTURAL**  
*Ahead to 25 Years*

## 私の研究歴

本号では大和裕美子会員にご寄稿いただきました。  
出会いと発見から紡がれる研究の軌跡をお読みください！

この度、ニューズレターの研究歴に原稿を寄せる機会をいただきました。ありがとうございます。お話をいただいて、研究歴を振り返ってみたところ、＝日本国際文化学会歴であることにあらためて気がつきました。

まず初めての全国大会デビューが日本国際文化学会でした。2010年、東海大学札幌キャンパスの自由論題で発表させていただきました。初めてで緊張したのか、発表の記憶はあまりなく、情報交換会で出た「じゃがバター」のおいしさに感動したことをよく覚えています（笑）。

その頃は博士後期課程の3年目で、壁にぶつかった気分でした。修士論文は山口県民の岸信介観というテーマで書いたのですが、行き詰まりを感じ、山口県宇部市の長生炭鉱の水没事故のための追悼碑を建てようとする市民運動を事例とした研究内容に変えました。しかし研究を続けているうちに、また行き詰まり、研究者以外の道も模索しなければならないと思い始めていました。しかし年齢を重ね、研究の大変さだけでなく、奥深い面白さも覚えつつあった当時、他に関心のある職にも出会えず、途方に暮れていました。とりあえず、韓国語の勉強を始めてみました。1942年に起こった長生炭鉱の水没事故の犠牲者の7割は朝鮮半島出身で、追悼碑を建てる運動を展開していた「長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会」は、韓国で結成された遺族会の遺族との交流を重視していたので、調査の過程では必然的に韓国遺族と出会うことになりました。しかし、まったく韓国語ができなかったので通訳の人を介してしか、遺族の言葉を理解できず、本当に研究するのであれば、韓国語を習得しなければと思い、一念発起して、韓国語の習得を目指すことにしました。研究とは違う語学の勉強が新鮮で、とてもいいリフレッシュの時間にもなり、また研究の意欲が湧いてきました。

ソウル大学で韓国語を学んでいるうちに、国際ロータリー財団の奨学生に、その翌年には日韓交流基金のフェローとなり、寒さと辛さとお酒が苦手な私でしたが、思いのほか韓国生活が長くなりました。そうして再び長生炭鉱のテーマで学会発表させていただく機会を得て、山口県立大学で開催された全国大会で発表しました。

## 大和裕美子 (九州共立大学)



2024年度4年生ゼミ生と一卒論提出直後—

追悼碑建立の運動が進んだおかげで、私の研究も何とか進んでいき、2014年に博士論文を提出しました。翌年には平野健一郎賞をいただいて、身に余る思いでした。しかし、学振PDに落ちてしまい、これからの生活をどうしようかと、また途方に暮れていました。当時、ソウル大学のアジア研究所に籍を置かせてもらっていました。研究所から寄宿舎に帰る途中に涙を流していたのを覚えています。そうしたところ、実家から歩いて15分ほどにある九州共立大学という大学が採用してくれて、生まれ故郷での教員生活が始まりました。

今年で大学教員生活9年目ですが、まだまだ試行錯誤の毎日です。日々の忙しさのなかで研究のモチベーションを保ち続けるのは至難の業ですが、織姫と彦星が会うように、1年に1度、7月の全国大会で先生方とお会いするのが楽しみで、その日発表できるようにという気持ちで、何とか研究を続けることができます。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。



長生炭鉱坑口前—フィールドワーク中—

## 事務局からのお知らせ

### 2025年度のICCOに向けて

2025年度の短期集中セミナーは京都（龍谷大学深草学舎）で実施予定です。日程は8月24日（日）～8月30日（土）、参加費は45,000円（宿泊費、朝食、懇親会費用2回分含む）。期間中、学会会員で見学等を希望される方はICCO事務局までご連絡ください。セミナー最終日の30日にはフィールドワークの成果発表会を実施します。発表会はオンラインでの配信も予定しております。

2024年度の資格認定申請受付は3月31日（消印有効）までとなっております。該当する学生がおられる場合には、申請のお声かけをお願いいたします。短期集中セミナー参加者の申請のほか、学習活動報告による資格取得も可能です。参加校および会員のみなさまのご協力をどうぞよろしくお願いいたします。  
※ 詳細は学会ウェブサイトのICCO資格認定制度から、「2024年度版 学生からの申請（資格認定申請）」をご確認ください。

問い合わせ先：ICCO事務局（松居・池田） [kumagusu@world.ryukoku.ac.jp](mailto:kumagusu@world.ryukoku.ac.jp)

### 第15回平野健一郎賞募集（締切：4月30日）

第15回平野健一郎賞の募集を開始します。多数のご応募をお待ちしております。応募に関しては学会ウェブサイトの「平野健一郎賞規程」をご覧ください。

- 応募対象：本学会に所属する若手研究者
- 授与対象：直近の学会誌『インターカルチュラル』に掲載された論文、又は会員の自薦、他薦により推薦のあった論文で大学紀要などに掲載された論文等
- 応募書類：応募書類は審査後に返却いたします。
- 応募結果の発表：第24回全国大会総会において発表し、授与式を行います。

応募先/問い合わせ先：日本国際文化学会事務局 [jsics@world.ryukoku.ac.jp](mailto:jsics@world.ryukoku.ac.jp)

### ご連絡先変更時のお願い

ご所属、ご住所等の変更の際には、学会事務局までお知らせください。4月下旬に学会誌『インターカルチュラル』第23号を発送予定ですのでご協力をお願いいたします。

連絡先：日本国際文化学会事務局（松居・池田） [kumagusu@world.ryukoku.ac.jp](mailto:kumagusu@world.ryukoku.ac.jp)

### 会費納入のお願い

2024年度の年会費を未納の会員は年会費のご納入をお願いいたします。納入状況がご不明の場合は学会事務局へお問い合わせください。

一般会員：10,000円、大学院生：5,000円、学部生：2,000円

- ◆ ゆうちょ銀行からお振込みのとき
- ◆ 記号番号 00920-8-325835 日本国際文化学会（ニホンコクサイブンカガッカイ）

- ◆ ゆうちょ銀行以外等からお振込みのとき
- ◆ ゆうちょ銀行 店名〇九九 店番099 当座預金 口座番号0325835

- 過去の会費未納分は相当額の学会誌購入でも充当できます。
- 2025年度分年会費は次号のニューズレター送付時にご案内する予定です。

#### 訃報

山川清太郎会員（京都先端科学大学）が2025年1月1日に逝去されました。2021年に自由論題で報告、『インターカルチュラル』第22号には書評を発表するなど、旺盛な活動が偲ばれます。謹んで哀悼の意を表します。

#### 【編集後記】

立春を越えてから寒波が到来し、寒い日が続きましたが、ようやく春めいてきました。会員の皆様、季節の変わり目には体調にお気を付けてください。

編集者・高橋は学会でお世話になっている出版社の方と一緒に、日本科学未来館でパリ・ノートルダム大聖堂展を鑑賞してきました。タブレットに映し出されるノートルダムの姿に大興奮です！（近畿大学：高橋梓）



駿河台出版社・三修社の皆さんとノートルダム展を訪問！